

フランス・ペイコンの言語観 —伝達論的・認識論的視点の交錯—

松 浪 茂

1. 方法論的問題点

ペイコンによって取り扱われた言語問題に関する箇所を解釈しようとするとき、その解釈を一段と困難なものとしている大きな要因として、彼が問題として取り上げた言語様式の多面性を指摘することができよう。ペイコンの言語哲学上の諸問題をペイコン研究史上最初に実証的に論証したフンケは、その論文の前半部分においては、ペイコンの学問体系の中における言語哲学の占める位置を明らかにした上で、『学問の発達』第1巻16章1—7節および『学問の尊厳と進歩』第6巻1章（以下 AL, De Aug. と略記）の文法学に関する叙述の進行にしたがい、アリストテレスの引用句を予備的に考察した後、以下の8項目、すなわち、(1)非言語的伝達手段(2)非言語的伝達手段の分類(3)文法の目的(4)一般文法と思弁文法(5)言語評価と統一語(6)言語と民族(7)音声生理学・韻律・アクセント(8)正書法の各問題を言語学史的考察の対象とし、論文の後半部分においては、AL 第2巻14章11節、De Agu. 第5巻4章および『ノーヴム・オルガヌム』第1巻アフォーリズム43, 59, 60（以下 NO と略記）の市場のイドラ (Idola Fori) に関する発言を論拠として、言語批判 (Sprachkritik) の問題を哲学的に考察している⁽¹⁾。更に以上の各問題群は、同じくフンケによる世界語（普遍語）の問題を発生論的に論証した論文の中では、言語哲学上の基本的問題群として大きく4項目に分類製理されている⁽²⁾。すなわち、(1)普遍語・普遍文字および一般思弁文法(2)一般音声生理学(3)個別言語と民族性との関連を扱う個別言語本性学(4)一般民衆の母国語は学問にとって危険であるという言語批判である。確かにフンケの分類方法はそれぞれの問題群を咀嚼し、問題の性格を理解する上で、画期的な成果をおさめている。すなわち、各問題

群の言語学史的・哲学的意義が解明されている。しかしながら、もし各問題群と言語批判との間に何らかの関連性があり、その関連性を総体的に把握しようとするならば、フンケの分類方法では不十分であり、そこにプラトン、アリストテレス以来の古典的命題である「事物一言語一思考」という座標軸の設定が方法論的にどうしても必要であった⁽³⁾。これによって、フンケが「言語批判」と命名し、ジョーンズが「言語敵視」と呼んだベイコン言語理論の事物と言語に関する認識論的意義と限界が明らかにされたと思われる。それにもかかわらず、ベイコン言語理論の解釈をなおかつ難解なものにしているもう一つの要因として、彼の叙述の中にみられる具体例なき一般的表現および用語の曖昧さとともに、彼の言語理論の背後にひそんでいる言語に対する多様な態度を指摘することができよう。なぜならALおよびDe Aug.の言語理論が扱われている上述した箇所において、明らかに伝達論的視点からなされた「伝達の機関」についての叙述の中に、認識論的視点および神学論的視点が混入し、それらがベイコン言語理論の理想と現実という両極的な視点とともに継横に交錯して複雑な様相を呈していると思われるからである。それゆえ、ベイコン言語理論を解釈しようとする際、「事物一言語一思考」という座標軸に加えて、新たな次元・場・視点の設定による分析が方法論的に必要になってくることは明らかである。

ベイコン言語理論に関する最新の研究成果の一つであるエルスキー論文は、象形文字についてのベイコンの見解と同時代の見解との比較考察によって両者の相違に注目し、ALおよびDe Aug.におけるベイコン語源否定説およびNOにおける市場のイドラを論拠として、ベイコン言語理論の事物と言語の分離というフンケ以来の結論を再考察している⁽⁴⁾。(同論文においてフンケへの言及はない。)しかしながら、エルスキー論文は上述したようなベイコン言語理論の背後にかくれた伝達論的・認識論的視点の錯綜および現実と理想という視点の混入に関して偏狭な解釈を行っているように思われる。全体的に同論文は、ベイコンによって自然に対する科学的態度から導き出された一つの言語理論にすぎないフンケの使用した

「言語批判」という概念を何ら吟味せず、盲目的に前提としているように思われる。したがって、外界の自然を研究対象とする自然哲学の領域にその適用が限定されるべき「言語批判」を廣大解釈し、道徳学・法学・神学などの他の領域にまでその適用を敷衍しているように思われる。換言すれば、同論文においてすらいまだに、ただ自然科学の研究対象である外界の自然の領域という限定された枠の中で、すべてのペイコン言語理論が取り扱われているといえよう。本稿は、方法論的には、上述したようなペイコン言語理論の背後にかくれた多様な視点に関する作品内解釈としての一考察であり、研究史的には、ヴォルフの総体的素材論的研究⁽⁵⁾でも、ジョーンズの影響史的研究⁽⁶⁾でもなく、また、ウオレスのようなペイコン伝達論の総体的研究⁽⁷⁾でもボルノーのような言語教育的実存的研究⁽⁸⁾でもなく、更にまた、ロッジのような科学思想史上のペイコン思想の意義についての総体的実証的研究⁽⁹⁾でもなく、フンケからエルスキーに至る一連のペイコン言語理論の研究成果に修正を施し、これを補足しようとするものである。したがって、本稿では、純粹に言語そのものの内部構造を問題とする一般音声生理学、正書法⁽¹⁰⁾を考察の対象からはずし、「事物一言語一思考」という座標軸および伝達論的・認識論的視点と直接かかわりをもってくる箇所を限定する。

2. 言語観の史的背景

ある思想家の言語観に世界観が、逆に、その世界観に言語観が反映されているとするならば、その思想家の言語観を手がかりとして彼の世界観を把握することができよう。ペイコンの言語観は彼の世界観と密接なかかわりをもっている。また、いかなる思想家の場合でも思想史的背景なくしては思想家独自の思想体系を生み出しえなかったように、ペイコンにおいてもその例外ではない。クノー・フィッシャーの指摘を待つまでもなく、ペイコンはエリザベス朝時代に生れ、エリザベス朝時代は宗教改革に基づき、宗教改革自体中世からルネッサンス（人文主義）に至る過程の途中に起こっている⁽¹¹⁾。ペイコンは思想史的背景として、豊かな土壌に生れ落ちた

といえる。また、同時代のシェークスピアと比較して、彼の家庭環境もきわめて恵まれている。父ニコラスは国璽尚書 (Lord Keeper) の位をきわめた国務大臣であり、母アンはエドワード 6 世の教師サー・アンソニー・クックの次女にして (古典語の学識で有名な 3 姉妹の一人)、ギリシャ語、ラテン語、イタリア語、フランス語を母国語のように読むことのできる才女であった⁽¹²⁾。ベーコンが 3 歳のとき、母アンはジュエル主教のラテン語の *Apologia* を英訳して *Defense of the England Church* (1564) を出版しているし、父ニコラスが長く病の床にあるときは、夫婦でキケロやセネカを朗読して励まし合う程、快活で楽しく学識豊かな家庭であった⁽¹³⁾。ベーコンは、時代背景としても家庭環境としても、大変恵まれた雰囲気の中で育っている。ベーコン言語理論の性格に決定的影響を与えた史的背景として、旧約聖書の中にあられたヘブライ的言語観、プラトンの『クラテュロス』の中で論じられた言語哲学、アリストテレスの『オルガノン』の中で記述された論理学を指摘することができよう。なぜなら、ベーコンの叙述の中に、それぞれの直接的な影響の痕跡を認めることができるからである。ルネッサンスの万能の天才にふさわしく、ベーコンは上述したような恵まれた土壌・環境の中で、言語哲学・論理学についてはプラトン・アリストテレスの命題を再考し、信仰については古代から続いている中世的な伝統を受け継いでいる。ベーコンが古代の学説および中世の伝統を受容する際、それらを自己の哲学体系に適合するように変容させている点は注目に値する。ベーコン言語理論の背後にひそんでいる様々な視点は、まさにそれらの受容の際にベーコンの精神の中に存在して、そのような変容を決定させたベーコン哲学の特性に他ならないと思われる。

旧約聖書

旧約聖書の中にあられた言語観は、キリスト教の信仰にささえられて中世末に至るまで生き続け、庶民にまで信じられた。その根本的な言語観は以下の通りである⁽¹⁴⁾。神はアダムを作り、アダムに言語 (ヘブライ語) を与えた。アダムは生物にその性質を示す名で命名した。神はアダムとヘブライ語で話した。バベルの塔以後 72 民族 72 言語が派生したが、これが今

日の民族と言語の祖である。以上がいわゆる言語神授説、ヘブライ語起源説およびバベルの塔以後言語の混乱によって生じた民族言語分裂説の概要である。このような言語観は、宗教改革以後、聖書が母国語に翻訳されるに及んで、大きな変革を受けることになる⁽¹⁵⁾。エリザベス朝時代に生きたベイコンも、一見するところ、依然として上述したような中世的な言語観を確かな知識としてもち、健全な信仰として信じていたと思われる。

ベイコンは文法学を詳述するまえに、文法の目的に触れて次のように述べている。「話し言葉と書き言葉の考察が文法学を生み出してきた。なぜなら、人間はその墮落によって奪われた祝福を回復しようと今も努力しているからである。人類最初の呪いが諸学の技術発明によって対処されてきたように、(言語の混乱という)第二の呪いからは文法によって人間はのがれようと努力してきた。」⁽¹⁶⁾ De Aug. では更に加筆して、ベイコンの好んで用いる医学的な薬剤の比喩を使用しながら、文法の威厳を「言語の混乱に対するある種の解毒剤の任 (antidoti cujusdam vicibus... contra maledictionem illa confusionis linguarum)」⁽¹⁷⁾の中に求めている。また、ベイコンは当時の学問が主として母国語ではなく古典語によってなされている点を考慮して、文法の効用を母国語よりも外国語、とりわけ、古典語において認めていた。バベルの塔による言語の混乱に言及している点から推測するなら、ベイコンの言語観は中世的であると言えることができる。ベイコンが相互理解が可能であったアダム語への回帰を文法によって実現を図るとき、文法は宗教化され宗教的な任務を帯びて、文法の目的の中にすでに伝達論的な視点が芽ばえている。エルスキー論文によって引用されたベイコンと同時代のアレクサンダー・トップの発言をみる限り、トップも依然として中世的な言語観を信奉している⁽¹⁸⁾。すなわち、神がアダムを作り言語(ヘブライ語)を与えたが、ヘブライ語22文字は天地創造時の事物(22個)の性質を象徴することができた。しかし、人間や事物の種が増加したために、アダムが象形文字を作ってそれらに正しい命名を与えた。大洪水およびバベルの塔以後、現在のアルファベット25文字以上が派生した。トップの著書を読むことによって、現存する言語からアダム語の言語状況を回復

することができる。以上がトップの言語観の概要であるが、ペイコンの言語観との相違点は明らかである。それぞれのヘブライ文字が天地創造時の事物を象徴する一種の象形文字とみなしている点、アダムが古代エジプトの象形文字を作ったとする点、そして現存する言語からアダム語の言語状況の回復が可能であるとする点はペイコンの言語観とは異なっている。ペイコンにとって、象形文字とは古代エジプトの文字のことであった。ペイコンの著作の中には、アダムによる象形文字創造説の言及もなく、後述するように、ヘブライ語起源説については単なる暗示が得られるだけなのである。最大の相違点としては、トップが現存する言語から直接アダム語の言語状況を回復できると信じているのに対して、ペイコンは文法によって言語の混乱を解決し、アダム語の言語状況を回復できると信じている点を指摘することができよう。この後者の伝達の視点をエルスキー論文は見損じている。したがって、バベルの塔による言語の混乱およびその関連事項に関する限り、ペイコンの言語観は中世的であるが、アダム語の言語状況を回復する手段において同時代のトップと異なっている。ペイコンは、まさにこの点において、聖書の伝統を変容させ、彼の哲学体系の中に取り入れているのである。

プラトン

すでにギリシア時代の言語哲学の課題は、事物と名称の関係であった。プラトンの対話編『クラテュロス』の中で論じられているように、事物はその本性にしたがって (*φύσει*) 命名されているのか、それとも恣意的に慣習的に (*νόμος, θέσει*) 命名されているのかということがギリシア言語哲学の問題であり、アリストテレスは言語は恣意的に発生したという合理主義に傾いていたと思われる⁽¹⁹⁾。その後、中世、ルネッサンス (人文主義)、宗教改革を経て17世紀に至ったとき、ペイコンはこの古典的命題を再考した。ペイコンは文法学を詳述する前に、思考は必ずしも言語を媒介として表現されるとは限らないとして、言語以外の伝達手段を考察している。ペイコンはこれを AL では「思考の符号」、De Aug. では「事物の符号」と呼び、符号と観念 (*notions/notiones*) が「ある程度類似、または、一致し

ているもの(some similitude or congruity)」(AL),「一致しているもの(ex congruo)」(De Aug.)と、符号と観念が「協定によるもの(ad placitum)」(AL/De Aug.)とに二分して、前者の例として象形文字と身ぶりを挙げ、後者の例としてシナや極東の王国で使用されている実物符号(Characters Real)を挙げている⁽²⁰⁾。実物符号は事物あるいは観念(notions)をあらわし、お互いに相手の言語が理解できない国の人でもその符号によって意志疎通が可能であると考えられていた。これは一見プラトンの対話編『クラテュロス』の中心的命題、すなわち、物の名と物とは本質的關係があるとするクラテュロスの *φύσει* 説および物の名と物との關係は習慣・契約であるとするヘルモゲネスの *νόμοι* 説、*θέσει* 説を想起させるに十分である。しかし、ベイコンの関心は言語以外の伝達手段と事物あるいは観念の關係に向けられているのである。後述するように、ベイコンの言う‘ex congruo’が本質的一致なのか、あるいは、ある程度の類似なのか、解釈上問題ではあるが、ベイコンがプラトンの「物の名」を「言語以外の伝達手段」にすりかえて変容させている点は一目瞭然である。ベイコンはプラトンの命題である事物と言語(観念)の關係については、いわゆる NO の市場のイドラから導き出されるように、外界に実在する事物を研究対象とする自然哲学の領域に関する限り、ヘルモゲネスの習慣契約説を支持していることができる。なぜなら、言語は一般民衆の理解力に合わせて作られ、ラテン語 *fortuna* (運命)のように実在しない物の名称か、ラテン語 *humidum* (湿)のように実在するものから性急に引き出された名称か、そのいずれかであるゆえに、微細な自然研究には言語は不適切かつ危険であったからである⁽²¹⁾。

アリステレス

豊かで恵まれたゴーラムベリーの大邸宅で育ったベイコンは、12歳と3ヶ月という当時としても少し早い年齢でケムブリッジ大学のトリニティ・カレッジに入学したが、16歳の頃すでにスコラ哲学の一学課であるアリステレスの論理学の中に、人間生活の福祉にとっての不毛性を看取し、早くも天才ぶりを発揮している⁽²²⁾。アリステレスの論理学(*Ὀργανον*)に対

して、ベーコンが *Novum Organum* (1620) の中で批判したのは、アリストテレスの三段論法そのものではなかった。すなわち、ベーコンが攻撃したのは、(1)アリストテレスの三段論法が論証の発見には役立つが、諸学の技術の発見には役立たない点(2)帰納法における矛盾的事例が不備な点(3)一般の命題が正しく帰納されたとしても、中間概念が自然に關して無造作にでたらめに個々の事例から引き出されている点 (*Idola Fori*) であった⁽²⁸⁾。タイトルとしては *Ōrganon* を *Novum* をつけて変容させている点、および、内容的にはアリストテレスの論理学を実質的に認識論に変容させている点は疑いの余地がない。

このようにベーコンは、従来の学説・伝統を受容する際、自己の哲学体系に適合するように変容させて取り入れているのであるが、その変容を決定させた彼の基本理念は、一言でいえば「実用性」に裏付けされた伝達論的・認識論的視点であるといえよう。以上のような予備的考察から得られたベーコン言語観の基本的理念を手がかりにして、AL および *De Aug.* 中のベーコン言語理論の問題点、すなわち、エルスキー論文の中心的論点である 'ex congruo' の解釈を吟味しながら、「事物符号」および「思弁文法」における上述した視点の交錯について検証する。

3. 「事物の符号」の意義

ベーコン言語理論を解釈する際、絶えず念頭におかなければならないのは、彼の言語に対する多様な態度、すなわち、ベーコン言語観の基本理念である伝達論的・認識論的視点の交錯である。エルスキー論文は、全体的に、ベーコン言語理論における事物と言語の分離というフンケ以来の結論を急ぐあまり、上述した視点を見失い、事物の符号のもつ伝達論的意義を評価していないように思われる。AL, *De Aug.* の中にあらわれたベーコン言語理論が、知識の伝達の術 (*Ars Traditiva*) として扱われている点を確認しなければならない。これは伝達の機関 (*Organum Sermonis*)、伝達の方法 (*Methodum Sermonis*)、伝達の例証 (*Sermonis Illustratio sive Ornatum*) に分類されているが、フンケ以来エルスキーに至るまで、ベーコンの

言語理論として絶えず問題になってきたのは、まさにこの伝達の機関の中のベイコンの発言である。

アリストテレス引用句の解釈

AL 第2巻16章2節において、ベイコンは文法学を詳述する前に、アリストテレスの「様々な語は様々な思考 (cogitations) の映象であり、様々な文字は様々な語の映象である」⁽²⁴⁾(『命題論』1章1節)を直接引用しているが、思考の伝達手段としての言語の性格を例証するために、わざわざアリストテレスの同書から部分的に引用したように思われる。したがって、ここでは最初から外界の事物が考察の対象外となっており、アリストテレスの同書におけるような認識論的な解釈は成立しない。すなわち、外界の事物と魂の印象は万人に同じであるが、音声言語や書記言語は民族によって異なるという解釈である⁽²⁵⁾。ベイコンの著作の中に外界の事物が万人に同じであるかどうかという認識論的な言及は全くない。したがって、この点についてのベイコンの見解は不明である。しかし、音声言語と書記言語が民族によって異なる点は、青年期に駐仏大使エイミアス・ポーレットの随員として渡仏し、ラテン語、ギリシア語、ヘブライ語、スペイン語にまで言及していることから、彼は経験的に知っていた。では、魂の印象についてはベイコンはどのように考えていたのであろうか。この問題は、思弁文法の中の個別言語本性学に、言語と民族の思考との関連性を認める発言があるため、思弁文法と密接なかかわりをもっている。したがって、ここではアリストテレスの引用句を伝達論的な視点からのみ解釈して、その認識論的な解釈については、思弁文法を扱うときに再考する。

実物符号から事物の符号への展開

ベイコンはアリストテレス引用句の直後に、思考は必ずしも言語を媒介として表現されるとは限らないとして、言語以外の伝達手段(身ぶり、実物符号)を考察している。「いろいろな観念の (notionum) 多様性を説明できるほど十分にいろいろな違いに分けられるものは何でも、その違いが感覚によって知覚される限り (modo differentiae illae sensui perceptibiles sint), 人から人へ様々な思考を運ぶ手段 (vehiculum cogitationum de

homine in hominem) となるかも知れない。」⁽²⁶⁾ここでも、伝達論的視点の中に認識論的視点が混入していることは一目瞭然である。ペイコンが、シナや極東の王国で使用されている事物あるいは観念 (notions/notiones) をあらわすような実物符号——いわゆる漢字——を、後述する象形文字と同様に文字や語でないと判断している点は、今日からみれば誤りである。ペイコンの視野の中には、ヨーロッパのアルファベットしか入ってこないのである。しかしながら、市場のイドラから判断して外界の事物に関する限り、事物と言語の乖離は救い難いものであったから、ペイコンの理想はこの乖離を克服しアダム語の言語状況を回復する点にあった。このような視点に立ってみれば、すでに上述した文法学の目的が伝達論的な意味でアダム語の言語状況の回復であったように、実物符号は伝達論的にも認識論的にも彼の普遍語という理想を実現させる手段としてペイコンの目に映じていたと思われる。また、純粹に伝達という点を考えても、実物符号は普遍語（世界語）としての価値を十分もっていたと思われる。しかしながら、現実に実物符号で書くためには、基本となる語根と同数の莫大な数の符号が必要なため、その実用化についてはペイコンは疑問視していた。したがって、そのような理想は人類によってまだ実現されてなく、伝達論的な意味でも認識論的な意味でも「事物の符号」の研究はまさに時代の要請物 (Desideratum) であったのである。現実問題としては、ペイコンは語や文字の伝達手段としての価値を大いに認めていた。「言葉と文字による書きものは最も便利な伝達の機関 (organa traditivæ longe commodissima) であるから、この部門はたいして役に立たないようにみえるかもしれない。」⁽²⁷⁾しかしながら、最終的にはペイコンは貨幣の比喻を用いながら次のようにしめくくっている。「しかし、この部門はいわば知識の造幣局にかかわっているからである。なぜなら、お金が価値のかわりに流通して承認されている代用貨幣であるように、語も思考のかわりに流通し承認されている代用貨幣であり (words are the tokens current and accepted for conceits), お金には金銀とは別の種類のものもありうることを知っておく方がよろしいからである。」⁽²⁸⁾ここにおいても、伝達論的視点の中に認識論的視点が混

入していることは明らかである。

‘ex congruo’ 解釈

すでに述べたように、「思考の符号」(AL)、「事物の符号」(De Aug.)は、符号と観念が「ある程度類似、または、一致しているもの」(AL)、「一致しているもの (ex congruo)」(De Aug.)と、符号と観念が「協定によるもの (ad placitum)」(AL/De Aug.)とに二分され、前者の例として象形文字と身ぶりが挙げられ、後者の例として実物符号が挙げられた。ペイコンは象形文字と身ぶりの中に、意味された事物との「類似性 (affinity/aliquid similitudinis)」を認め、De Aug. では両者ともに事物の「ある種の象徴 (emblemata quædam)」であると述べている。ペイコンが象形文字および実物符号を言語としてみなしていない点においても、象形文字の中に認めた事物の類似性・象徴性を漢字のような実物符号の中に認めていない点においても、今日からみれば明らかに誤りであるが、それが当時のヨーロッパを中心とした世界観のあらわれなのである。確かに、エルスキー論文で比較されるように、以上のようなペイコンの象形文字観は、ヘブライ語の22文字を天地創造時の22個の事物を象徴する一種の象形文字とみなした同時代のトップの見解ときわだった対照をなしている⁽²⁹⁾。しかしながら、De Aug. の次の文章を同論文は見落している。すなわち、「象形文字の使用は非常に古く、ある種の尊敬の念が払われている。とりわけ、大古の種族であるエジプト人の間では。象形文字は初期に生れたある種の文字であり、様々な文字を構成する要素そのものよりも古いと思われるほどである。おそらくヘブライ人の間を除いては (nisi forte apud Hebræos)。⁽³⁰⁾である。ペイコンのこの一文から、次の点を十分推論することができる。つまり、古代エジプトの象形文字はアルファベットの文字よりも古い、ヘブライ語の方が古代エジプトの象形文字よりも更に古いということ、これである。また、後述するように、ペイコンは思弁文法の下位区分である個別言語本性学の例として、ヘブライ語には合成語がきわめて少いという事実から、ヘブライ人が単一民族であることを言語学的に指摘してみせている⁽³¹⁾。以上の点を考慮してみれば、バベルの塔、ヘブライ語の年齢の古さ、ヘブラ

イ人の単一民族性等に関するベイコンの発言は、ヘブライ語起源説を暗示しているように思われる。このベイコンのヘブライ語起源説という立場に立って、エルスキー論文の中心的な論点である‘*ex congruo*’の概念を解釈するなら、同論文の主張するようなベイコンとトップの相違はほとんどなくなってくる。すなわち、同論文はこの‘*ex congruo*’をクラテュロスのように「本質的關係」としてではなく、象形文字のもっている象徴性を手がかりに「絵画的類似性」として解釈することにより、ヘブライ語に象形文字のような象徴性をもたせてエジプトの象形文字をアダムが作ったとするトップとベイコンとの相違点を強調しようとしている。しかしながら、同論文のようにこの‘*ex congruo*’を単なる「絵画的類似性」と解するならば、象形文字と観念との間にはクラテュロスのような「本質的關係」は存在しなくなり、むしろかえって、象形文字よりも古いとベイコンが考えているヘブライ語と観念との間に「本質的關係」を推定することができる。逆に、この‘*ex congruo*’をクラテュロスのように「本質的關係」と解するならば、古代エジプトの象形文字よりも更に古いとベイコンが考えているヘブライ語と観念との間にも「本質的關係」を容易に推定することができることになる。つまり、この‘*ex congruo*’を「絵画的類似性」と規定しようと、「本質的關係」と規定しようと、ベイコンのヘブライ語起源説の暗示は疑いの余地がないのである。このようなベイコンのヘブライ語起源説に立って考えるならば、バベルの塔の言及から判断して、同論文の主張するようなベイコンとトップの相違がほとんどなくなってくる。すなわち、ヘブライ語起源説およびバベルの塔に関する限り、ベイコンとトップの言語観は中世的であるということが出来る。トップのアダムによる象形文字創造説はささいな相違にすぎなく、両者の最大の相違点としては、トップが現存する言語からアダム語の言語状況を回復できると考えているのに対して、ベイコンが伝達論的にも、認識論的にも、「事物の符号」によるアダム語の言語状況の回復を理想としていた点を指摘することができよう。したがって、象形文字は、ベイコンの‘*ex congruo*’の意図が「本質的關係」であれ「類似的關係」であれ、実物符号とともに言語以外の伝達手段

の例にすぎなく、アダム語の言語状況の回復を任務とする「事物の符号」の研究の中に単なる研究資料として吸収されることになる。ペイコンは、アダム語の言語状況の回復手段として、シナや極東の王国で使用されている実物符号や古代エジプトの象形文字によるべしとは夢にも考えていなかったのである。

4. 思弁文法の意義

すでに述べたように、文法学の目的は、いわば解毒剤が毒を中和するように、パベルの塔による言語の混乱という人類第2の呪いを解き、伝達論的に相互理解が可能であったアダム語の言語状況を回復することであった。つまり、事物の符号が伝達論的な意味でも認識論的な意味でもアダム語の言語状況の回復手段であるとすれば、文法学は伝達論的な意味でアダム語の言語状況の回復手段であった。また、当時の学問が母国語ではなく、主に古典語によって研究されていたわけだから、文法学は実用的な任務を帯びていた。De Aug. で加筆された箇所にも、大法官たるペイコンにふさわしく法廷の比喻を用いたきわめて興味深い一文がある。「文法学は諸学に対するいわば法廷の下役人の任に (*viatoris locum*) ついでいる。なるほど高貴ではないが、主に必要な任務である。」⁽³²⁾ この諸学を呼び出す法廷の下役人の比喻からは、諸学の基礎研究としての文法学のイメージを読み取ることができる。文法学の任務は、「一般文法」と「思弁文法」に二分され、前者は実用的・教育的・伝達論的な言語習得に関係し、短期学習と会話の正確さを目的としている。アダム語の言語状況を回復する手段として、文法学が伝達論的な意味をもっていたのは、まさにこの一般文法の性格によるところが大きいと思われる、後者は「ある程度哲学に任せるもの」(De Aug.) で、「語の力と本性の吟味」(AL)、「語と語の類似ではなく、言語と事物あるいは理性との類似 (*analogiam inter verba et res, sive rationem*) の勤勉な研究」(De Aug.) と規定され、「しかし、論理学に属する解釈ではない (*citra tamen eam, qæ Logicæ subservit, hermeniam*)」⁽³³⁾ (De Aug.) と指摘されている。

思弁文法の目的

思弁文法は、アダム語の言語状況を回復する手段として、いかなる意味をもっていたのであろうか。フンケは、思弁文法の任務について、ベイコンが名称学 (Bezeichnungslehre) や意味論 (Bedeutungslehre) を考えていると指摘しているが⁽³⁴⁾、まことに正鵠を得ているといえよう。なぜなら、名称学は名称と名称が示すものとの関係を、意味論は語とその意味との関係を吟味するからである。しかしながら、思弁文法の性格を示唆するような「ある程度哲学に任せるもの」および「しかし、論理学に属する解釈ではない」という表現の中に、思弁文法の任務の目的を解明する糸口があるように思われる。前者の表現は哲学の基礎研究としてのイメージを示唆し、後者の表現は命題についての真偽の判断を含んだアリストテレスの『命題論』とは異なった思弁文法の性格を明示している。すなわち、思弁文法は、アリストテレスの『命題論』のような論理学としてではなく、哲学 (ベイコンの学問体系によれば、第一哲学、自然神学、人間学) の基礎研究としてのイメージをもっていることになる。実用的な価値をもった文法学の「諸学」の基礎研究としてのイメージと、文法学の一部をなす思弁文法の「哲学」の基礎研究としてのイメージを再考するとき、そこに同質のイメージが働いていることに気がつく。このイメージでもって、「自然哲学」の領域から生み出され、伝達論的にも認識論的にもアダム語の言語状況の回復を目的としている事物の符号と、伝達論的な意味でアダム語の回復を目的とした文法学とを再考するならば、哲学は「諸学」の一部であり、自然哲学は「哲学」の一部であるから、必然的に思弁文法と事物の符号との関連が浮き上がってくる。すなわち、言語以外の伝達手段である事物の符号において、符号と事物あるいは観念との認識論的な関係が問題であったように、思弁文法においても言語と事物あるいは理性との認識論的な関係が問題になってくる。それゆえ、アダム語の言語状況を回復する点において、一般文法が伝達論的な意味をもっているのに対して、思弁文法は認識論的な意味をもってくるのが考えられるのである。

語源学との関連

思弁文法における言語と事物あるいは理性の関係を吟味する前に、言語理論の中に挿入された語源尊敬説および諸源否定説の意義について再考してみたい。なぜならプラトン語源論が思弁文法における言語と事物あるいは理性の關係に直接かかわってくるからである。AL 第2巻16章3節において、「命名が理性 (reason) と理解力 (intendment) に由来するものと考えられる」⁽³⁵⁾ 語源研究は「優雅な思索であり、古代研究の点では尊敬に値するが、真実がまじっていることは少く、実りも少ない」という所見が述べられている。De Aug. では更に態度を明確にして、「命名および語源 (impositione et originali etymologia) は初めに恣意的に (ad placitum) 定められたのではなく、ある理性によって (ratione quadam), その意味にしたがって (significanter) 引き出されたと仮定する」⁽³⁶⁾ プラトン語源論には絶対に (minime) 反対であり、「優雅であり、いわばろうのように自由に曲げることができ」、古代研究の点では「多少 (quodammodo) 尊敬に値するが、真実は少なく空虚な実りである」という所見が述べられている。AL, De Aug. とともに語源を尊敬し、語源を否定している点は疑いの余地がないのであるが、語源尊敬の最大の理由は古代の探究という点であり、語源否定の最大の理由は研究成果の不毛性という点にあるということができよう。

まず、プラトン語源論についての問題として、全集版で指摘されているように、De Aug. ではプラトン語源論の挿入位置が移動している点が注目に値する⁽³⁷⁾。すなわち、AL ではプラトン語源論は事物の符号の分類後に挿入されているのに対して、De Aug. では思弁文法の任務の説明後に移動している。この移動の意味は何であろうか。この問題と関連して、AL では言語は事物の符号とともに ad placitum の中に分類されていたが、De Aug. では ad placitum から削除されたとするフンケの指摘も同じく注目に値する⁽³⁸⁾。このフンケの指摘から推論するならば、次のような仮説を立てることができる。すなわち、AL ではベイコンの関心が主として言語と事物の關係にあったのに対して、De Aug. では関心の重点が言語と理性の關係に移動したということ、これである。このような仮説に立ってみれば、

プラトン語源論の挿入位置の移動をベイコンの「観念」と「理性」の区別を手がかりにして説明することができ、そこから更に、ベイコン語尊敬説・語源否定説の意義についても、したがって、思弁文法の任務である言語と事物あるいは理性の関係の意味についても解明されると思われる。

ベイコンの言語理論の解釈を難解にしている要因として、すでに具体例なき用語の曖昧さを指摘したが、ALにおいても De Aug. においてもかなり明確な意図をもって区別されて使用されている用例がある。その対照的な用例は、カントの「悟性」と「理性」の区別を想起させる「観念」と「理性」にあらわれている。すなわち、事物の符号において外界の事物 (things/res) を目で知覚して観念 (notions/notiones) としと表象し、符号 (Notes/Notæ) として恣意的に表現する場合、AL でも De Aug. でも「観念」が共通して使用されている⁽³⁹⁾。他方、言語 (verba) と事物 (res) あるいは理性 (ratio) の類似を研究する思弁文法の任務を詳述する際、AL では「様々な語 (words) は理性 (reason) の様々な足跡であり印である」、⁽⁴⁰⁾ De Aug. では「確かに様々な言語 (verba) は理性 (ratio) の様々な足跡であり、それゆえ、様々な足跡はやはり何か体について述べるものだ。」⁽⁴¹⁾ という言語と理性の関係を示す発言があらわれている。この箇所は、ヴォルフによれば、プラトンの対話編『テアイテテスト』の中の発話された言葉は「音声の中に現われた思考 (*διανοία*) のいわば影」の名残りであるという⁽⁴²⁾。プラトンとベイコンの解釈の相違については後述することにして、De Aug. の中で思弁文法についての記述が加筆されている点からも、ベイコンの関心の重点が AL におけるよりも De Aug. において言語と理性の関係の方に移動してきたことが暗示されている。一見するところ、ベイコンの「観念」と「理性」の区別は、前者が「符号」に関して用いられるに対して、後者は「言語」に関して用いられるような印象を与えている。同様な用例は、プラトン語源論の挿入箇所においても確認できる。すでに述べたように、ベイコンはプラトンを評して、命名が恣意的になされたのではなく、ある理性によって (*ratione quadam*) 意味にしたがって引き出されたと仮定している者という所見を述べている。ここでも、ベイコンの用い

る理性には言語の影がつきまどっているような印象を与えている。しかしながら、外界の事物を目で知覚し、観念としと表象し、符号として表現するにせよ、言語として表現するにせよ、観念として表象する段階までは同じ認識過程を経ているはずである。そして観念と言語は表裏一体をなしているはずである。もしそうだとすれば、思弁文法の「言語と事物あるいは理性」という表現は、「観念である言語と事物」あるいは「観念である言語と理性」というグループに種別化できよう。「観念」が語の意味内容をあらわす概念を意味するとすれば、「理性」の意味するところは単なる概念では決してない。言語と理性の結びつきは、プラトンの言及および影響があるところにあらわれているということができただろう。命名が恣意的に (ad placitum) ではなく理性によって (ratione) 引き出されたとプラトン語源論を解釈していることから推論するなら、プラトンの語源論に「理性」の働きを認めたベイコンが、プラトン語源論の挿入を、事物の符号の領域から事物と言語と「理性」の関係を扱う思弁文法の領域に移動させたのは、ALにおけるよりも De Aug. に至って、言語と「理性」のただならぬ関係に気がついたからと思われる。De Aug. に至っても、外界の事物と言語の乖離は依然として救い難いものであった点を考慮すれば、ベイコンの言語と理性の関係の中には外界の事物の介入する余地は全くなかったといえる。ベイコンが否定したのは事物と言語の関係であり（この意味ではプラトン語源論は否定される）、言語と観念および言語と理性の関係ではなかったのである（この意味ではプラトン語源論は肯定されると思われる）。したがって、語源学否定の最大の理由は、自然哲学に対する不毛性にあるといえる。事物と言語が乖離している以上、事物を研究するのに言語を研究しても無益ということになる。他方、語源学尊敬の最大の理由は、自然哲学の領域外における古代の研究にあるといえる。観念と言語および言語と理性の間には密接なかわりがあるのだから、言語による観念あるいは理性の研究は成立することになる。その際、観念と理性の関係が問題となる。例えば、「本」という事物を知覚して、「本」という観念で表象し、「本」という言語で表現する場合、外界に実在する「本」が事物であり、

「本」という意味が観念であり、「本」という音声および文字が言語であることは明らかであるが、どの部分が理性に相当するのであろうか。個別言語本性学で各民族の言語の中に民族の特性を認めていることを考慮すれば、理性とは観念の言語化を決定する際に働く民族精神であるように思われる。この点は言語と理性の関係を扱う個別思弁文法の任務と深くかかわってくる。また、ベイコンの語源学尊敬の理由であった古代の研究は聖書学とも結びついてくる。ベイコンが語源学を尊敬した論拠として、ヴォルフは、ベイコンがおそらく読んでいたと思われるヨハネス・セラヌスの『クラテュロス』注釈版を指摘している。セラヌスの注釈はクラテュロスとヘルモゲネスの立場の統合を試みた解釈であるという⁽⁴³⁾。ベイコンの述べている語源学尊敬説は、セラヌスの注釈の中に、とりわけ、聖書解釈に関連してあらわれているというヴォルフの指摘は注目に値する⁽⁴⁴⁾。セラヌスの注釈は、『クラテュロス』の中にユダヤ語という明確な言及はないにもかかわらず、プラトンが語源研究にギリシア語と同様にユダヤ語などの外来語を考慮する必要を認めていたと推測して、アレクサンドリア・クレメンス等のユダヤ語による聖書解釈の例を挙げているのである。ベイコンの著作の中にヘブライ語の原典による聖書解釈の言及は見あたらない。しかしながら、ヘブライ語起源説、バベルの塔など、当時一般に信じられていた聖書の伝統を確かな知識としてもち、健全な信仰として信じていることから考えれば、ベイコンは原典による聖書解釈に関して決して否定はしなかったと思われる。ベイコンは、外界の自然研究に関しては、近代のあけぼのを見通していたのであって、聖書の中に自然研究を求めようとするなど、木に登りて魚を求むの愚をおかすことはなかったのである。この点は次の認識の基準と深くかかわってくる。

思弁文法の任務

以上の考察から、ベイコンが語源学を否定したことも尊敬したことも疑いの余地がない。事物と言語の関係については否定し、観念と言語および言語と理性の関係については認めていたことも確かである。ここでそれらのもので深くかかわってくる思弁文法の言語と事物あるいは理性の関係が

問題になってくる。その際、それらの関係を統一的に説明する補助手段として、認識の基準の設定がどうしても必要である。なぜなら、同じ事物と言語の関係であっても、認識基準によってはその意味するところが全く異なってくるからである。「人間（ヘブライ語で *Adám*, ラテン語で *homo*）」という語を例にとれば、その語が示す実在する「人間」と言語としての「人間」は全く別のものであり、「人間」という語を手がかりにして実在する人間の研究は不可能である。実在する人間の染色体の研究には医学・原子物理学など科学的認識方法が必要である。それに対して、*Adám*, *homo* の語源を考えれば、その元の意味はともに「土でできたもの」であり、それぞれの言語が生れたときの背景、神話の世界をかいまみることができる。したがって、科学的認識を取るか日常生活的認識を取るかによって、同じ事物と言語の関係であってもその意味するところは大いに異なってくることになる。このような点を考慮してみれば、思弁文法の言語と事物あるいは理性の関係は次のように分類することができる。

すなわち、科学的認識基準（自然哲学）に立ってみれば、事物と言語の間には本質的關係はなく（*Idola Fori*）、事物研究としての語源学は否定される。したがって、あらゆる学問は、それが自然哲学の領域にかかわってくる限り、自然哲学を基礎としなければならない。ペイコンが NO 第1巻アフロリズム80において強調しているのは、まさに、この点に他ならない。諸学は、その実践部分に関して、自然哲学に基づかないのなら大きな進歩は期待できない主旨を述べて、「天文学、光学、音楽、多くの機械技術、そして医学そのもの、さらには（人々がより怪しむかもしれないが）道徳的・政治的哲学（*philosophia, moralis et civilis*）そして論理的諸学」⁽⁴⁵⁾を列記している。ペイコンの自然哲学の目的が自然の形相（*forma*）や法（*lex*）の発見にあった点を考慮してみれば⁽⁴⁶⁾、実際問題として、倫理学や政治哲学が果してどの程度自然哲学に負うことができるのか疑問であるが、ペイコンは少くとも諸学の基礎としての自然哲学の基礎を打ち立てたのである。この自然哲学の基礎研究である思弁文法は、言語と事物あるいは言語と理性の概念吟味としての任務を帯びてくる。思弁文法はこの意味では

事物の符号の基礎研究であるといえる。しかしながら、日常生活的認識基準に立ってみれば、科学的認識基準からすれば本質的關係をもたなかった言語と事物あるいは理性の關係でもって、十分学問を成立させることができることになる。AL 第2巻13章4節でベイコンが従来の帰納法と區別して自己の帰納法について弁明しているのは、まさに、この点である。道徳学、法学、神学など一般民衆の生活に関する学問の領域においては、事物の一般的性格をあらゆる概念の代用貨幣あるいは印 (the current tokens or marks of popular notions of things) たる言語で、十分学問を成立させることができるとして、「道徳学や法学において、否、神学においても（なぜなら、神は御自身を最も単純な者の能力に合わせることを喜んでおられるので）」^[47]と例示している。同じような主旨はAL 第2巻25章16節において、聖書の中に自然哲学を求めると哲学的聖書解釈に関する叙述の中にもあらわれている。「神の靈の範圍と意図は、聖書の中に自然の事物を表現することではない。ついでの場合および人間の能力や道徳的、神学的なことに合わせる場合は別である。」^[48]つまり、聖書の中にあらわれた自然の事物をあらゆる言葉には、事物の真理は表現されてなく、一般民衆が理解できる程度の概念であり、道徳学や神学で使用される概念であるということになる。Adám という語は、それが形成されたときの神話の世界を表現しているものであり、この意味では、ベイコンは原典による聖書解釈について十分支持したと思われる。要するに、ベイコンにおいて、理性によって観念が言語として表現される限り、事物研究としてではなく、概念研究として語源学は成立するといえる。それゆえ、頭初に述べた諸学、とりわけ、自然哲学の基礎研究としての思弁文法の意義が解明されたと思われる。その任務は、認識論的な立場からの事物と言語（観念）あるいは言語（観念）と理性における概念吟味であり、事物の符号の基礎研究である。概念研究として語源学が成立し得た点は、言語と理性の關係を扱う個別思弁文法と深くかかわってくる。

個別言語比較

思弁文法の下位区分として、文法の中で最も高貴な種類とされる個別的

な言語比較がある。すでに述べたように、ベイコンの関心の重点が AL の事物と言語の関係から、De Aug. の言語と理性の関係に移動したとき、初めて加筆された箇所である。思弁文法の任務が言語（観念）と事物あるいは理性の類似関係を認識論的に問題にしたとすれば、個別言語比較は言語（観念）と理性の類似関係を伝達論的に問題にしているということが出来る。個別言語比較の第 1 の任務は、文語であれ、口語であれ、現存する多数の言語の比較研究である。個々の言語のすぐれた点を比較し、様々な言語の多様な特性 (*de variis linguarum proprietatibus*) を研究するなら、語彙が増大するのみならず、心の中の考えを正しく (*rite*) 表現するために、個々の言語の美的特性が獲得できるだろうと予想して、次のように述べている。「話し言葉そのものの (*orationis ipsius*) ある種の最高に美しい映像 (*imago*)、肖像 (*exemplar*)、飾り (*insigne*) が個々の言語で (*in singulis linguis*) 美しいところから作られるだろう。」⁽⁴⁹⁾ エルスキー論文は、思弁文法のもつ認識論的な文脈の中でこの箇所を解釈しているが⁽⁵⁰⁾、語彙増大の点では語彙論の領域に属し、思っていることを正しく表現するという点では伝達論にかかわり、個々の言語の美的特性の獲得という点では文体論に直結していることは明らかである。さすがにフンケは、ここでの問題を単なる人工語としてではなく、美的にすぐれた雅語 (*eine ästhetisch hervorragende Kunstsprache*) としてとらえているが、全体の文脈を統一語 (*Einheitssprache*) および普遍語 (*Universalsprache*) として解釈している点は無理があると思われる⁽⁵¹⁾。ベイコンの個別言語比較の目的は、世界中どの国にでも通じることのできる話し言葉としての美的普遍語の創造では決してなく、ギリシア語・ラテン語などの言語を研究して英語の語彙を増大させて、思っていることを「美しく」かつ「正しく」表現するという表現力の増大であり、豊富な例証および適確な表現の獲得である。その意味では、雄弁家のベイコンにふさわしく、修辞学的な研究であると思われる。ベイコンの普遍語の理想は、伝達論的にも認識論的にも実物符号および事物の符号の研究に如実に示されている。現実の普遍語としては、ベイコンはラテン語こそ伝達を容易にし、永遠の生命を書物に与えると考えていたのである

⁽⁵²⁾。それゆえ、ここでは個々の言語とそこに反映された理性とを比較研究することによる思考の美的にしかつ正確な言語化を問題にしているといえよう。

個別言語比較の第2の任務は、言語と理性にかかわっている点は第1の任務と同じであるが、伝達論的な意味が欠落して、個人の心理から民族心理の認識へ関心の重点が移動している点、異なっているといえよう。個々の言語を比較する際、同時に、個々の言語の文法構造から個々の民族の精神構造を把握することができるかと述べて、以下の様な例を挙げている。すなわち、「個々の言語そのものから、人々・民族の気質・性格について (*de ingenii et moribus populorum et nationum, ex linguis ipsorum*)」⁽⁵³⁾貴重にしてかつ観察に値する (*observatu digna*) 徴候 (*signa*) が獲得されるであろうと予想している。具体例としては、ギリシア語には合成語が多いのに対して、ラテン語には少ないという事実から、ギリシア人は芸術に適し、ローマ人は実務に適していると推定し、また、ヘブライ語には合成語や外来語が少ないという事実から、ヘブライ人をナザレ人と推定している。他方、古代の言語には様々な格変化、活用変化、時制に満ちているという事実から、現代人よりも古代人の方が鋭敏にして繊細であると推定している。最後の例は、今日の言語学からみれば誤りであるが、個々の言語現象から民族の精神をさぐるうとする試みは、後のヘルダー、フンボルトを先取りしている⁽⁵⁴⁾。この第2の比較言語研究は、きわめて現代的な発想法であり、ベイコン言語理論の中でも特異な位置を占めているといわなければならない。

個別言語比較に共通しているのは、言語比較の段階で個人レベルでの単なる「語と観念」ではなく、個人の心理を超越した各民族の心理・精神を問題にしている点である。ただし、第1の任務が美的にしかつ正確な言語表現を問題にするときには、個人レベルでの伝達に立ち帰っている。「言語と理性」が「個々の言語と民族の心理・精神」を意味していることは明らかであるから、ベイコンの「理性」とは、個々の民族に特有な思考・心理・精神という意味の「民族の理性」である。観念の言語化を決定

しているのは、まさに、この民族の理性であると思われる。それゆえ、古代史研究の一環として、概念研究としての語源学が成立しえるといえよう。

思弁文法の成立過程

最後に、思弁文法の「言語と事物あるいは理性」という枠組をその構成要素に分析してみることによって、その歴史的成立過程をかいまみることができよう。ペイコンは、アリストテレス『命題論』からの一文「事物一魂（*ψυχή*）—音声言語—書記言語」を思弁文法の枠組としてそのまま使用したと思われる。すでに述べたように、ペイコンのアリストテレス引用句の解釈は伝達論的であった。アリストテレスにあっては、外界の事物と魂の印象は万人に同じであるが、音声言語と書記言語は民族によって異なるという認識論的な解釈である。ペイコンにあっては、外界の事物が万人に同じであるかどうか、それに関する言及がないため不明であるが、音声言語と書記言語が民族によって異なることは経験的に知っていた。第2の個別言語比較の中で、個々の言語によってその民族の精神構造が異なることが前提とされているから、魂の印象についてはペイコンはアリストテレスの見解と異なって、民族によって異なるという見解であったといえる。つまり、ペイコンは、認識論的な解釈であったアリストテレス『命題論』の一文を、直接引用句としては伝達論的に解釈し、思弁文法の枠組としては、アリストテレスの解釈とは異なった認識論的な解釈を行って利用したといえる。更にペイコンは、プラトンの『テアイテトス』からの一句「思考（*διανοία*）—音声言語」の関係を「理性（*ratio*）—言語」にすりかえたと思われる。プラトンにあっては、正しい知識は感覚でもなく、正しい臆見でもなく、更に、正しい臆見に言語が加わったものでもない。しかし、ペイコンにあっては、もはや「正しい知識」かどうかは問題ではなく、個別民族の特性である「美的な表現」、「民族の心理・精神」の方に関心の重点が移動している。したがって、ペイコンはプラトン、アリストテレスの語句の解釈を変容させて統合し、思弁文法の枠組としたと思われる。つまり、ペイコンは、直接引用句にあっては、アリストテレスの「事物一魂—音声言語—書記言語」を、事物を削除して、そのまま使用し〔伝達論的解釈〕、

思弁文法にあっては、魂を前提にし、音声言語と書記言語を一括して、「事物—〔魂＝観念〕一言語」という形式上の枠組を作り上げ〔アリストテレスとは異なった認識論的解釈〕、更に、プラトン語源論において命名の源とされる「理性 (ratio)」を事物と対置させることにより、「事物—〔魂＝観念〕一言語」あるいは「理性一言語」に二分させたと思われる。

問題の展望

以上の考察から、ベーコンの伝達機関についての洞察のいたるところに、伝達論的視点および認識論的視点が交錯し、個別言語比較の第1の任務に至っては、まさに、文体論そのものと深くかかわっていることは明らかである。したがって、ベーコンの学問体系における「弁論術」の位置付け、「認識論」と「弁論術」との関連性の検証については稿をあらためて述べてみたい。今日ローマカトリック教会を除いて、ラテン語はをば死語となり、かわって英語が国際語としての地位を独占しつつある言語状況を考慮すれば、世界語としてのラテン語の地位に関するベーコンの予測は、みごとにはずれたことを意味している。しかしながら、ベーコンの理想が認識論的にも伝達論的にも一種の普遍語（世界語）であった点を再考してみれば、今日の生物・物理・化学における化学記号の使用、並びに、国際語としての英語の地位確立は、ベーコンの理想としていたアダム語の言語状況がほぼ実現されたことを意味している、その意味でベーコンは実に現代的であったといえよう。

注

作品引用はすべて Spedding 標準版により、Works と略記。AL の章節については Wrght 使用。

1. O. Funke, 'Sprachphilosophische Probleme bei Bacon,' *Englische Studien*, 61 (1926—27), pp. 24—56.
2. *Ibid.*, *Zum Weltsprachenproblem in England im 17. Jahrhundert* (Heiderberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, 1929), pp. 1—5.

3. 拙稿「フランシス・ベーコンの言語観—言語敵視思想の哲学的意義とその限界—」*Sophia English Studies* 2 (1977), pp. 10—28.
4. M. Elsky, 'Bacon's Hieroglyphs and the Separation of Words and Things,' *Philological Quarterly* 63 (1984), pp. 449—460.
5. E. Wolff, *Francis Bacon und seine Quellen* (Berlin: Verlag von Emil Felber, 1910), p. 98.
6. R. F. Jones, 'Science and Language in England,' *The Seventeenth Century* (California: Stanford Univ. Press, 1951), p. 144.
7. Karl R. Wallace, *Francis Bacon on Communication and Rhetoric or: The Art of Applying Reason to Imagination for the better Moving of Will* (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1943), p. 12n. Wolff から Rossi まで、それぞれベーコン言語理論に触れているが、「言語批判」の限界を暗示しているのは伝達論を扱った Wallace のみである。
8. O. F. Bollnow, *Die Macht des Worts: Sprachphilosophische Überlegungen aus pädagogischer Perspektive*, Neue Päd. Bemühungen 17/18 (1964; rpt. Tokyo: Ikubundo, 1971), p. 1.
9. R. Rossi, *Francesco Bacone, della Magia alla Scienza* (Bari: Editori Laterza, 1957) trans. S. Rabinovitch, *Francis Bacon from Magic to Science* (London: Routledge and Kegan Paul, 1968), p. 170.
10. 正字法と音声生理学の詳細については、渡部昇一著『英語学史』(大修館、昭和50年) pp. 82—83 および pp. 114—116 参照。
11. K. Fischer, *Francis Bacon und seine Schule* (Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung, 1875), p. 1.
12. A[lexander] B[alloch] G[rosart], 'Bacon, Ann, Lady,' *The Dictionary of National Bibliography* (1917) S[idney] L[ee], 'Bacon, Sir Nicholas,' *ibid*.
13. B. Farrington, *Francis Bacon: Philosopher of Industrial Science* (New York: Henry Schuman, 1949), pp. 20—21.
14. 渡部昇一著『言語と民族の起源について』(大修館、昭和48年) pp. 9—12.
15. *Ibid.*, pp. 13—20, pp. 81—86.
16. Works III, 40.
17. Works I, 653. ベーコンの医学的比喩については拙稿「フランシス・ベーコンの批評理念—『学問の発達』における語彙論的考察—」カリタス叢書14 (1979) pp. 63—111 および「ベーコン『随筆集』一初版献辞の書誌学的、文学的意義—」、『英学論叢』石井正之助先生古稀記念論文集 pp. 105—119 (金星堂、昭和57年) 参照。
18. Alexander Top, *The Oliue Leaf; or Vniuersall Abce* (London. 1603) in M. Elsky, *ibid.*, pp. 450—452.

19. H. Moser, 'Wege der Sprachbetrachtung,' in *Deutsche Sprachgeschichte* (1950; rpt. Tokyo: Ikubundo, 1962), pp. 1—4.
20. Works I, 651—53, Works III, 399—400.
21. Works I, 171.
22. Works I, 4.
23. AL. II, XIII, 1—5.
24. Works III, 399.
25. 渡部昇一著『言語と民族の起源について』pp. 28—31.
26. Works I, 651.
27. Works I, 653.
28. Works III, 400.
29. Elsky, pp. 453—455.
30. Works I, 652.
31. Works I, 655.
32. Works I, 653.
33. Works I, 653; Works III 401. フンケは 'hermeniam' のところで「中世思弁文法」を考えている。Funke (1926-27), p. 34.
34. Funke (1926-27), p. 34.
35. Works III, 400.
36. Works I, 654.
37. Works III, 400n.
38. Funke, *ibid.*, p. 30n.
39. Works I, 651; Works III, 399—400. AL でも De Aug. でもアリストテレス引用句では、言語 (words/verba) に関して「思考 (cogitations/cogitationes)」が使用されている。AL II, XIII, 4 では、アリストテレス的表現の直後に、「語 (words) は事物についての一般的観念 (notions) の流通した代用貨幣および印」と 'notions' を 'words' について使用。同様に、AL II, XVI, 3 では、「語 (words) は思考 (conceits) のかわりに流通し承認されている代用貨幣」と 'conceits' を 'words' について使用、いずれにしても文脈は言語と事物の乖離であり、'cogitations' 'notions' 'conceits' はほぼ同義語。
40. Works III, 401.
41. Works I, 654.
42. Wolff, *ibid.*, p. 97.
43. *Ibid.*, pp. 97—98.
44. *Ibid.*, p. 97.
45. Works I, 188.
46. Works I, 228.

-
47. Works III, 388.
 48. Works III, 486.
 49. Works I, 654.
 50. Elsky, p. 454.
 51. Funke, *ibid.*, pp. 34—35.
 52. 拙稿「フランシス・ベーコンの批評理念」pp. 101—103 参照。
 53. Works I, 654.
 54. 「それ [= 真の言語哲学] は、単に名称に関する限り哲学的百科全書の索引に現在見られる意味論、すなわち、言語による人間の魂の解読であろう (*eine Entzifferung der menschlichen Seele aus ihrer Sprache*)」J. G. Herder, *Sprachphilosophische Schriften: Aus dem Gesamtwerk ausgewählt, mit einer Einleitung, Anmerkungen und Registern versehen von Erich Heintel* (Hamburg: Felix Meiner, 1960), p. 95. ヘルダーの言語観については、木村直司「ヘルダーの初期言語理論—文学と言語」*Sophia* 21 (Winter 1972), pp. 25—47 を参照。「人間的言語構造の差異性とその人類の精神的発展に及ぼす影響について (*Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts*)」Wilhelm von Humboldt, *Schriften zur Sprache* (Stuttgart: Reclam, 1973), p. 30.